

第1回「宮崎県生涯学習審議会」議事の概要

1 日時

平成22年5月10日(月) 13:30～15:30

2 場所

県庁4号館2階教育共用会議室

3 出席者

高橋 利行	宮崎大学教育研究・地域連携センター准教授
下清水 一正	延岡市公民館連絡協議会会長
脇谷 のりこ	フリーアナウンサー
初鹿野 聡	NPO法人ハートム理事長
片野坂千鶴子	特定非営利活動法人 みやざき子ども文化センター代表理事
後藤 祥子	(社) ガールスカウト日本連盟宮崎県支部支部長
小金丸 和代	県商工会議所女性会副会長
柳瀬 美津子	南九州短期大学 国際教養学科講師
吉田 多美子	県校長会代表(新富町立上新田小学校校長)
松山 清子	県地域婦人連絡協議会運営委員
高見 公子	宮崎日日新聞社文化部次長
岡田 和雄	青島青少年自然の家所長
岡林 稔	放送大学宮崎学習センター所長
中村 一男	宮崎大学大学院教育学研究科 講師
宮崎 幸生	県市町村教育委員会連合会会長(宮崎市教育委員会教育委員長)

県教育庁生涯学習課

興栢課長、大西補佐、黒木補佐、福田主幹、竹内主幹、島名主幹
衛藤社会教育主事、米満社会教育主事

県教育庁総務課

井上副主幹、近藤指導主事

※ 委嘱状交付

4 開会行事

- ・ あいさつ
- ・ 日程説明

5 正副会長選出等

- ・ 正副会長選出
会長：岡林 稔
副会長：高橋 利行
- ・ 諮問
- ・ 会長あいさつ



6 説明・意見交換

(1) 事務局からの説明

- ・ 宮崎県生涯学習審議会について
- ・ 宮崎県生涯学習振興ビジョンについて
(概要、成果と課題等)

(2) 説明に対する質疑・応答

(会 長) 本日の資料(振興ビジョンの成果と課題)の中で、平成20年度は、「平成20年度の実績」となっているのに対して、平成21年度は、「平成21年の事業等」となっているのは、平成21年度の評価自体が、暫定的なものであるからか。

(事務局) その通りである。

(会 長) 生涯学習振興ビジョンに対応した関係各課の事業の実施の外部評価についてはどのようにするのか。

(事務局) 外部評価については、県の施策についての外部評価を実施しているのでそれを反映させていく。

(委 員) 学校における地域の窓口担当教員は、どのような職種の方がやっているのか。地域教育推進担当の役割が重要であり、生涯学習振興ビジョンの中での評価は高いのにその成果が見えていない。

(事務局) ほとんどの学校において配置しているが、教頭のほか一般の教諭が担当することが多くなっている。

(委 員) 広瀬中は、窓口になる教諭が積極的に地域との連携を図っている。

(委 員) 振興ビジョンに記載されている「コミュニティーパワー」とはどのような意味か。

(事務局) 地域教育実践モデル事業の中で使った用語である。個人の力には、限界がある。地域力、地域の人材を連携させ、人と人とのつながりによる地域づくりを行う力である。

(3) 意見交換

(委 員) 延岡では、地域で子どもを育てることを重視してきた。夏休みに体づくりとしてのラジオ体操では、子どもだけでなく地域の方も参加している。

また、夏休み地区別登校を8年継続してきた。さらに、地域の中学生のリーダーシップを生かし、東海再発見ウォークを実施している。また、将棋大会・オセロ大会なども実施し、成果を上げている。公民館活動では、地域医療についての講演などを行っていて好評である。

(委 員) 宮崎市男女共同参画社会づくり審議会委員と家庭教育学級の講師として子育て講座などを行っているが、最近では、若い母親の情報交換の場や若い世代の公民館の活用も少ない。地域まちづくり委員としての活動の中でも学校と地域の連携が課題だと感じる。地域のマンパワーを引き出し一歩一歩実績を上げることが大切である。地域から学校に出向き、地域の方々から講師となった出前講座を実施していく中で、学校の行事も地域と連携して行えるようになった。

- (委員) 分野からではなく、人からものを考えていくことが大切である。地域でいきいきと暮らせる方法を地域ごとに提案していくことが大切である。人が幸せにいきいきと生きることの根源は、人の役に立つことである。社会人と地域人の2面性があり、ひとりの人間として地域でどう生きていくのかが大切である。時代にあった人間関係、コミュニティづくりが大切である。
- (委員) NPOを立ち上げて10年間、放課後子ども教室や子どもを対象とした体験活動など子どもの育ち、子どもと文化、芸術、子どもにとって安全な居場所づくりなどに関わってきたが、やはり地域の力を生かしていくことが大切であると考えます。
- (委員) 女性による女性のための団体など、がんばって楽しくやっけていけるのが生涯教育である。自己開発・自然体験・人との関わりという3つの柱で理念をもった世界市民になることが大切であると考えている。
- (委員) 会議所の女性部会としては、直接、子どもや学校と関わることはあまりなかったが、娘との関わりで、吾妻町の子ども会とのつながりやその保護者の方との連携がある。その中で、新学期の集団登校の見守りや敬老会での子ども会の発表など実施されていた。今後、女性部会の立場から学校・地域のつながりについて学んでいきたい。
- (委員) 生涯学習においては、学びたい人だけが学べる環境ではなく、みんなが学べるようになることが大切である。学びの機会における格差があってはならない。地方は経済のグローバル化の恩恵に大都市ほど与えることができず、出産を機に一旦離職した女性の再就労も「希望」を持ち難い状況である。一方、東京のような大都市ではリカレント教育やキャリア教育の推進が図られ社会の変化に対応した学びの場の提供と再就職が有機的に循環している。生涯学習の一部を取り上げて論ずるのも憚られるが学びの機会に地域格差が生じていることは憂慮される。
- (委員) 学校だけで教育をするには限界があり、家庭や地域との連携が大切である。また、子どもたちに人間力・生きる力を身につけさせるために、地域に開かれた学校、信頼される学校づくりが課題の一つである。外部の評価を行い、信頼される学校づくりを目指しているが、校長の指導力も重要になっている。学校教育は生涯学習の基礎を培うものという視点からも本審議会に参加できることは有意義なことである。
- (委員) 子育て支援の取組を継続して行っている。その中で、学校給食を親と一緒に食べる企画を行っているが、子育て支援に来る方は、仕事をしていない母親が多い。このような機会により、母親どうしがふれ合えることは大きな成果である。
- (委員) 取材を通して、教育、命、健康、福祉、様々な分野や年齢層の方々に関わってきたが、生涯学習において、その人がその人らしく、人と情報がつながることができるかが大切である。地域の現状を見ていると公民館活動の活動の有無など、地域の格差を感じる。地域の特性や得意とする部分がある。そういう視点からの議論を行っていく必要がある。
- (委員) 青少年自然の家3施設が指定管理者制度となり5年目となる。民間への委託業務になって気づくのは、権利と義務の問題である。権利だけを主

張する時代になってきたのか。どうしたら人がくるのか。施設は人なりという思いで努力している。全体の7割が社会教育関係団体の利用である。市町村の合併関係で子ども会の利用が減少している。体験活動を重視した取組が大切である。

(委員) 宮崎大学は、社会人教育を行う環境にある。中国と日本の学生の学びに対する姿勢には差がある。前者は自律的で、後者は他律的という傾向がある。塾経営者どうしが連携して学校教育に協力できたらと思う。

(委員) 20年後のあるべき姿を2年間で考えたい。学習は遊び、生涯学習を夢のあるものととらえ、楽しい生涯学習の実現を図るための発言ができればと思う。

(委員) 経験豊富な委員の皆様の意見についての称賛や課題がある場合は、その解決に向けてのヒントを示すことが自分の役割ではないかと考えている。

(委員) 学校・家庭・地域という体系図に違和感を感じる。地域の中に学校・家庭がある。全体としてみると生涯学習の本質がもっと見えてくる。そのようなスタイルが望ましいと考える。

(委員) 振興ビジョンの統計資料については、可能な限り最新のものにしてほしい。また、大きく変動している部分についても知らせてほしい。

(委員) 「家庭の日」は、家庭生活に密着しているのか。私たちの意識の問題が大きい。子どもたちは、少年団などの活動で地域にいることが少ない。

(委員) 親子会と組んで場面づくりなど、「家庭の日」も地域一丸となって取り組む強い姿勢が必要である。